昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十七年九月　十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十四巻　第九号

（通第三九八号）

目次

63.9.15

親鸞聖人と私……池山榮吉……(1)
手織の着物……福島政雄……(7)
問いに答えて……井上善右ヱ門……(10)
凡骨日誌抄(17)……西元宗助……(13)
聞光願生……清水凡禿……(15)
念仏詩抄……木村無相……(18)
ともしび……花田正夫……(21)

親鸞聖人と私

池山榮吉

闇より光へ

「かなしきはあくなき利己の一念を、もてあましたる男にありけり」（石川啄木）

あの時の私の気分は丁度この歌の通りだった。

放逸な欲求に掴まれて、そのさいなみからのがれようともがく気さえもくじけてしまった。

従来、若存若亡のたよりない状態になった仏の幻影は、無論このときも消えていて、仏とは人間の妄想が造り出した概念に過ぎない、と思いきめなければならなかった。

日頃出にくかった念仏が、てんで出て来ないばかりか、何方に向って遁路をもとめたものか、その見当さえもつかなかった。

外界のままになる、ならないはさておいて、自分で自分の心をどうすることも出来ないとは、この時つくづくおもい知らされた。

自分の腑甲斐なさに思い到ると同時に、これまで私が生涯の目的として、たえず追求してきた名誉というものが問題となって、結局自分は残念ながら、到底名誉を背負う資格がない――その主体となるべき自分が無力だから――とあきらめなければならなくなった。

目的の無くなった人生！何たる味気ないものだろう。

名誉などと、そんな浮いた話をしている場合でない。今現にこういう悪い心がむくむくと起こってきて、それを押えつけようとする良心が、ピシピシはねかえされる始末では、私の究極の運命は、この世からなる永劫の地獄の外にない。

私は絶望と恐怖そのものであった。

人無き空曠のはるかなるところに、悪徒・猛獣・毒虫に追いつめられた二河白道の旅人は私であった。

あゝこういう時に、本統の信仰があったならと、強烈な真信の願求に、息ははずみ、胸ははちきれんばかりになった。迷子になった幼子が、あわただしく母を尋ねるように、いらだった心は、今度こそ真の仏を見つけようと、くるおしいまでにあせった。

すると――真暗闇のなかに一点の光の浮び出たように――不図胸に浮かんだのが「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」の文であった。

二河白道を前に見て、進退きわまった旅人の耳にはいった、東岸発遣の声がそれであった。

私の眼はこの文に見入った。私の耳はこの文に聞いた、私の心はこの文に凝った。

その刹那、焼石が水を吸い込むように、心の奥までこの文が浸み透った。

西岸招喚の声が聞こえたのであろう。私は心にある衝動を感じてハッと我に返った。信仰の門をひらく手懸りが見つかったのだ。

私は、親鸞とあるのを私と読んで、よき人とあるとを親鸞聖人と読んだ。そしてその文を口の中で繰返したかと思った途端――ドッと念仏が口を衝いて出た。瀧のみなぎり落ちるような勢で、しかもかって覚えのないやすらかさをもって。

今迄こころを占めていたやるせないさびしさはいつしか消えて、何ともいえないたのもしさが心の底から湧きあがるのを覚えた。これが他力の真境だな、とはじめて知ったときの心地！広大難思の慶心とはこれを言ったものか、体験の上から推知される。

こうして直接親鸞聖人のお手引によって、大悲選択の願心にひきあわされ、ただ念仏の心のおこると共に、心光摂護の境におかれた。これは私の四十二のときであった。

「平生のとき善知識のことばのしたに、帰命の一念を発得せば、そのときをもて娑婆の終り臨終とおもうべし」

世にいう厄年に「前念命終」を体験して、それから今日まで「後念即生」の日暮しをしてきたうちに、不思議の一つに数えられるのは、前に口に出にくかった念仏がやすやすと稱えられることと、仏の存在――体験後にあっては特に阿弥陀仏の存在――が、もう問題にあがらなくなったことで、これが白道を踏んで疑怯退心を生じない他力の金剛心――有漏の穢身に宿る――というものかと、われながらそぞろに勿体なく思うときがある。

「唯観念仏衆生、摂取不捨、故名阿弥陀」濁悪の群萌を悲引したまう如来、私達に間に合う唯一の御名。どうして南無阿弥陀仏と稱えずにいられるよう！

内に我心をみつめる

去年の暮ごろのことであった。（大正十一年）明けて来年は開宗七百年に当るそうだが、どうかこの機会に、聖人

を手に取るようにあり〳〵と、自分も拝見し、人にも紹介したいものだ。それには一体どうしたらばよいだろうか？とじっと思案をこらしたのであった。

まず第一に考えるまでもなく自明の方法と思われたのは、聖人の御一生をくわしく歴史的に詮索して、その真相を紹介することであった。

それには『御伝鈔』をはじめ、だん〳〵文献もあるようだから、それらを一々調べて見ようかと思った。

が、それは随分——私に取っては——大仕事だし、よしやってみたところで、果して私の想っているような聖人が現前されるかどうか？まだ手をつけないうちから、はやくも疑が崩したのであった。

本統に専門的に立入って深く研究したならいざしらず、いい加減の素人詮議で、ありふれた材料から、聖人の人格がこまかに、正確に、生々と、浮彫にして顕われて来ようとは、とても思われないことであった。

いにしえのなべての聖賢とか、偉人賢士とかにしてみれば、私達は聞いたり読んだりして、多かれ少かれ知ってるだけの材料で、趣味と必要の存する限り、大略その人柄の輪廓を想定する。それが私達のその聖賢とか、偉人賢士とかについて知ってる全分であって、私達はその想定に対して——気に入ろうが入るまいが——別段異議をさしはさむべき理由がない。

が、親鸞聖人にしてみると——人はいざ、私には——そうは行かない。

私が聖人の筆に、口にせられた文言を知っているのは——少くともその深さに於て——僅かなものだ。聖人の御伝記については、殆んど知ってるとは言われない。二三文献を読んだことはあるが、どれだけが果して歴史的に正確なものかを考えたこともないのだから。

それでいて私には——一斑をみて全貌をしるとでもいったものか——聖人がかなりわかってるような気がしている。

これこそ的確な史料に依って調べあげた結果だ、と主張する者があっても、若しその結果が、私の想ってる聖人と違えば、その調べが間違ってると、先天的な断定をさえ下しかねない確信がある。

実をいうと私には、いにしえはもとより現代でも、聖人のほどにわかっている人格はないのだ。

私はあの問題——どうしたら聖人をあり〳〵と拝見することが出来るかという——を間がな閑がな、とつおいつして考えた。その揚句——何日だったか今覚えないが——ある時、不図おもいついたことがあった。そしてその思いつきを、再び考一考した刹那、微笑がおのずから唇辺にただよって来るのを覚えた。

それは外のことではない。まことの親鸞聖人を拝見しょうと思えば、眼を外にばかり向けていては駄目だ。内にわが心をみつめると、そこにチャンと控えておいでになるということだ。

これがその問題の解決として適当だかどうかは知らないが、本統の聖人は、この方法を外にしては拝見出来るものでない、ということだけは、確かにおもえた。

惟うにこれは別段珍しい思付ではあるまい。恐らく昔からそれと明言した人もあろうし、現にそう感得してる人も多々あろう、ただ私としては、あちこち探し廻った揭句、よう〳〵聖人の在所をつきとめた自身の実験が、灯台もと暗しの譬も思いあわされて、おかしくもあり、尊くも感じられる。

この実験があってから、対聖人の関係が、革新されたとは思えないが、従来よりも一層緊密を加えた——むしろ融けて一つになった、と言った方が実感に近いかもしれない——ことは争えない。

「一人居てよろこばば、二人と思うべし。二人居て喜ばば、三人と思うべし。その一人は親鸞なり」の文にしても、以前は私が一人で喜んでいると、聖人もすぐ傍に居られて、一緒に喜んで下さるのだ、とばかり思って居たのであったが、聖人の在所が知れた今では、私の喜ぶこころのうちに、聖人の御喜びも流れているからは、私の喜ぶこころ、即、聖人の御心といただける。

「その一人は親鸞なり」のお言葉は、私達の喜ぶときばかりでない。私達の歎き悲しむ場合にも、怒り狂う場合にも、その他煩悩具足の凡夫として、さま〳〵のあさましい情の馳せる場合にも、母の子をおもうように憐念の意味で繰返される。

「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじこころにてありけり」すべてがこの調子だ。何のことはない、私達が迷い歩いて途方にくれそうな辻々には、チャンと先へ廻って待って居て下さるのだ。

煩悩具足の凡夫と「かねてしろしめして」身を苦毒の中においても、飽くまでも見捨てぬ大悲の悲願を体現された聖人なればこそ、こうも徹底した同感の態度に出られるのだ。

「踊躍歓喜のこころもあり、いそぎ浄土へまいりたくそうらわんには、煩悩のなきやらんと、あやしくそうらいなまし」とあるのも、隔てのやまない私達の逃げようにも逃げられないように、物見の上で見張って居て、声をかけて下さるので、雲居寺の阿弥陀仏が、逃げる人の袖をとらえたという夢想も思い合わされる。

「悲しいかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山

に迷惑して、定聚の数に入ることをよろこばず、真証の証に近づくことをたのしまず。恥ずべし傷むべし」と、聖人の歎きをうけたまわっては、罪業の織り出す幻影にあこがれて「あたら身を仏になすな花に酒」と、苦悩の旧里を楽とさえ見る錯覚にもてあそばされる自分を見出さずにはいられない。

「弥陀五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」何たる深刻な充実した真情の流露だろう！、「よき人の仰せをこうむりて」信じたまうた際に、深くふかく刻まれた自己内面の披瀝とうかがわれる。私達にはとてもそんなに周到で完全な、而も簡短で的確な、嫋々たる餘韻を含む言いあらわしは出来ないにしても、心に思ってる内容は実際その通りに相違ない。だからこの聖人の常の仰せは、私達の述懐としてそのまま借用して差支えない。

総じて聖人が御一身にかけておっしゃったお言葉は、聖人にしてみれば、ただ御自身のお感じを述べさせられたにとどまるのだが、私達から見れば、そのお言葉がそのまま私達の心に強い響をあたえるどころか、私達自身の内心の叫びとしかきこえないことがあるのは、もとよりその所と言わなければならない。

「なにごとも、こころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといわんに、すなわちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし」、「さるべき業縁のもようせば、いかなるふるまいもすべし」、「わろからんにつけてもいよ〳〵願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし、すべてよろずのことにつけて往生にはかしこきおもいを具せずして、ただほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なることを、つねにおもいいだしまいらすべし。しかれば念仏ももうされそうろう」。唯円房はたび〳〵聖人からこういう風に聞かされていたに違いない。

善いことをしたいにもしおうされず、悪いことをやめたいにもやめられず。二六時中、善悪のおもうようにならないのに苦しんでる私達――七百年後の私達に、どれだけこのおさとしが、たよりになることだろう！「わろからんにつけてもいよ〳〵願力を」あおぐようにならされた私達に、柔和忍辱なり、勇猛精進なり、臨機に当為の心が出て来ようとあるのは、煩悩の氷を菩提の水に溶かす大信海の転化作用とも謂つべきもので、この作用あればこそ、私達は、「ただほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なる事を、常におもい

いだしまいらせて」わがはからいをはなれた自然法爾の妙境に自適して、底力のある生活をさせていただけるのだ。

「流念難思法海」とは、こうした日常生活の推移を言ったものと解せられる。他面「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せに信順したところが、即、「樹心弘誓仏地」に違いない。心が一旦弘誓の仏地に樹てられた上は、念はおのずから難思の法海に流れて行く。聖人のおよろこびはすなわち私達のよろこびだ。

聖人のお言葉をこういう風にならべ立てて、一つ〳〵味わって行っては際限がない。

要するに聖人のお言葉――それが悲歎のであれ、感謝のであれ、はた解釈であれ、勸誡であれ――一々みな私達に――随分意地わるく批評の眼をもって見る癖のある私達に――そのまま受入れられる。これは実に驚くべき、他に類例のない不思議なことだ。

ところが、それよりもっと不思議なのは、私達が勝手なことを思ったり為たりすることが、きっと聖人の何れかのお言葉に関連して考えさせられることだ。「ながむる人のこころにぞすむ」とは聖人にもあてはまる。――これはどうでも私達の心と聖人の御心とが一つになっていて、私達の心の隅々まで聖人の御心が充ち満ちている結果とみるより外、解きようのない謎だとおもう。

しかしまたひるがえって考えてみれば、そうあるのは当然のことだとも思える。私達には、聖人は私達と同格の凡夫として、横超の真教をひろめるために、この世に来化したまうた弥陀としか思えないのだから。

衆生の成仏のために、自分の成仏を賭けられた無碍絶対の仏心と、功徳の体となるという煩悩成就の凡情とが、信楽開発の時尅の極速を合図に、一つに融け合うのに何の不思議があろう！

多生肱劫この世まで
あわれみかぶれるこの身なり
一心帰命たえずして
奉讃ひまなくこのむべし。

子の母をおもうごとくにて
衆生仏を憶すれば
現前当来遠からず
如来を拝見うたがわず

尽十方無碍光の
大悲大願の海水に
煩悩の衆流帰しぬれば
智慧のうしおに一味なり

――（完）――

手織の着物

福島政雄

手織りの着物は親の手織りの着物である。私の小学時代から中学時代の頃までも、私の家には手織りの木棉機があった。その機で母が手織りの木棉を織って、それを着物に仕立てて呉れたことが幾度かあった。その手織りの着物はなか〳〵強かった。十年も二十年も私はその着物を着ていた。

その頃の私には母の手織りの着物がどんなにありがたいものかわからなかった。ただ母に着せられるままにおとなしく着ていたばかりであった。併し強いものであったことは私も感じていた。呉服店から母が求めて着物に仕立てた他の着物は二、三年で駄目になるものも多かった中に、母の手織りの着物だけは、五年も十年も立派にしていた。私は青年時代から大学卒業の後までもその手織りの着物を着ていたことを記憶している。

その後、近角常観先生の仏教の信仰上の御話を聞くようになってからは、手織りの着物ということが私の身にしみて感ぜられるようになった。それは大正三年の頃であった。その頃の近角先生は日曜毎の御講話に、必ず親の手織りの着物の話をたとえ話として繰りかえされた。いつの日曜に求道学舎に参っても、必ずお話の中にこのおたとえが出た。

それは、親の手織りの着物には渾身の慈悲がこもるというお話であった。私ども一切衆生は悪戯な子供のようなものである。悪戯な子供は着物をすぐに破ってしまう。絹物などは無論着せられない。木綿物でも地の薄い安いものなどはすぐに破ってしまう。かような悪戯な子供に真実に相応する着物はただ親の手織りの木綿の着物より外にはない。それは親の慈悲の結晶である。悪戯な子供はどんな外の立派な着物をあたえられても、すぐに破ってしまうというその子供の本性を親の方ではかねてよく見抜いて居って、その子供の本性に相応する丈夫な木綿の着物を織ってあたえる、そこに親の渾身の慈悲がこもる。

私ども一切衆生は、悪戯な子供である。貪瞋煩悩の荒波は私どもの中に荒れ狂うている。この私どもは如何なる聖賢の教によっても救われることは出来ない。賢善精進の教は、私共の生命に到底相応せぬ絹の着物である、私どもには絹の着物を着る資格はない、賢善の教はそれが私どものいのちの問題となるとき、私どもの貪瞋煩悩の生命は悲しくもその教を裏切って行く。教そのものは尊いが、その教を裏切る私のいのちの故に、その教は私の着物としては成り立たぬこととなる。ここに親の慈悲の結晶としての手織りの着物が真実に私のためのものであることがわかる。それは久遠の御親の手織りの着物である。

この私が如何なる賢善精進の教によりても到底救われることの出来ない貪瞋煩悩の児であることを見とおして、これを憐れみ悲しみたまう久遠の御親の大いなるいのちは、親しく此の貪瞋煩悩の私のいのちの中に動き出でたもうて、私と共に苦しみ悩みたまう。そこに久遠の御親の大なる歎きがあり、その久遠の歎きの御声として私は南無阿弥陀仏を私のいのちの内に感ずる。この念仏こそは私のためにあたえられた久遠の御親の手織りの着物である。私はそこに私のいのちに相応する手織りの着物をいただく。

近角先生のお話をききはじめてからもはや二十年の歳月は過ぎた。そして手織りの着物ということは益々深い私の魂の問題となってきた。殊に私は此の世の父母を失って以来、様々のことに深い感じを持つようになった。母の手織りの着物のことも今更のように思い出される。その手織りの着物は二三十年という長い年月の間に今は無くなってしまったが、手織りの木綿の着物をつくってくれた母の心はとこしえに私のいのちの中に生きて行く。近角先生の手織りの着物の御たとえが私のいのちにしみるようになったのも、もとを言えば私の母の力である。

手織りの着物は何よりも強い。それは如何なる外の着物をも破ってしまう私のために織られた親の慈悲のかたまりである。私は此の世に母を持っていた年月を追憶し、私のために織られた機の筬の音をおもい起し、織りあげられた木綿の柄をあり〳〵と眼の前にうかべる。それらの上に、はたらいた母のいのちは、やがて私の今のいのちとなっている。今の私には母のいのちにも南無阿弥陀仏の廻向が感ぜられる。久遠の御親のいのちは母の追憶を通して生きた力として私の上に感ぜられる。

母の手織りの着物には無限の懐しさがある。その手織りの着物は単に此の世の母の賜物たるに止まるものではなかった。私は私の生命の一日々々が如来の手織りの着物の御廻向の一日々々であることを感ずる。貪瞋の波浪の狂い乱れるこの私の生命に、無限の慈悲を以て南無阿弥陀仏を廻向したまう。その久遠の御親の手織りの着物を身につけて、

私は荒み行く生命の根柢を潤わされ、悲涙と感涙との間に日暮らしさせられて行く。その値いがたき最初の深き縁を私は母の手織りの着物に感謝するのである。

（昭和八・九・十二）

母の詠草選

福島　政雄

螢

暮れわたる野川の岸のおちこちに光り涼しくとぶ螢かな

初子規

雨の夜も月のゆふべも待ちまちてこよひ嬉しくなく子規

子規

ほの〳〵と夜も有明の月かげに一こえなのる山子規

宵々にきけどもあかぬほととぎすいつも初音のここちのみして

雨中子規

むら雨のはれしゆふべに月出でて雲井はるかになくほととぎす

首夏

若葉さすまどにさし入る月影の恋しき夏になりにけるかな

雨後新竹

明がたの雨のなごりの朝つゆに色こそまされそののわか竹

子規

白樫の木の間もりくる月影になかぬ夜もなき山子規

雨後子規

宵の雨軒の玉水おとやみて有明の月になく子規

夕がほ

立ちよりて見ればなつかしたそがれの垣ねにさける花の夕がほ

初秋風

夏の日のあつさは今にさらねども軒ふく風の音ぞかはれる

けさ見れば垣ねの早苗田ほに出でて涼しくわたる私の初風

母性讃仰記より抄出

問いに答えて

慈光誌のご縁によって、関東の未知の方から切々たるお手紙をいただきました。そこにはその方の辿られた人生の悲しくも痛ましい実情と非運とが縷々と認められています。その内容をここに述べることは出来ませんが、共に人の世に生きるものとして感慨一入なるものを覚えずにおられませんでした。その末尾に「信仰は人格から人格に伝わるのが本当ときいていますが、私の場合そうした御縁がなく、御聖教と信仰書によるのみです。愚問ですが御回答いただき得ば幸甚です」と書かれ、四か条のお尋ねが記されてありました。すぐ筆を執って返書を認めましたが、納得していただけたかどうかを憂えます。諸兄姉に御助言があれば私方までお寄せ下さい。

問一、安田理深師のお言葉に「罪を犯すのも自然の法則に従わねばできぬことであるとあります。わが罪悪の恐ろしさも、自然法爾という大きな働きの中にあることと思えば慰められます。如来様がそうされたのだと受取らしていただいてよろしいでしょうか。

答。安田師が自然の法則と言われるのは、業道自然のことわりを申されたのでしょう。この点「歎異抄」の第十三章をよく〳〵ご覧下さい。それを自然法爾の事として如来様がそうされたのだと受取ることは大きな誤りです。罪を犯すのは己が業報の然らしめるところであり、それを見抜きたまい哀れみたまうて、汝の助かる道を成就した、南無阿弥陀仏を受けよと申される。そしてここにのみ私の罪障の一切が解消される至徳の道のあることをお知らせ下さいます。人間の力では何ともしてみようのない切羽詰まったこの私に手を差しのべ、回向して下さる大悲大智の至極であり、結晶である南無阿弥陀仏を頂戴しましょう。そこに必ず大きな安堵の世界が恵まれてまいります。その安堵のお念仏から如来に一切をお任せして己れの計いを離れるところに始めて自然法爾の世界が開かれてまいるのです。

井上善右エ門

問二、釈尊は弥陀の五劫思惟ということを、どうしてお説きにならねばならなかったのでしょう。私の悪心を救わんとされる御慈悲と拝察されますが、私には五劫十劫という表現がぴったりと来ませんので、お話しするときもこのお言葉を避けるという不心得者です。世上、神話的といわれることが、私にもいくらか感じられて落着かぬ気がいたします。頭だけで理解しようとする浅はかさから来るのでしょうか。

答、五劫思惟ということは、如来のやるせない大悲が、この私を完全にお救い下さる道を成就された御苦労をしみじみと味わ、せていただく言葉と頂戴しています。物語りや神話ではなく、真実なるものの具体的摂取活動（救われぬものを必ず救い遂げる）をこの私の身にいただくとき、如来の五劫思惟の御苦心が偲ばれます。聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と常に申されているではありませんか。宗教は知性で理屈をさぐるのではなく、魂でぶつかってゆく人に響いてくる真実です。五劫思惟ということを我身の上に引き当て、みて始めてその有難さが感じられます。人の親でも子のために心をくだくものを、如来が私を一子として哀愍したまうお心のやるせなさは如何ばかりでありましょう。

問三、阿弥陀如来はお釈迦様の精神を理想化したものであると友松円諦師は説かれましたが、そうしますと法蔵菩薩の御修行は、釈尊の現実の御修行の理想的表現としてよく理解されるように思います。しかしこれは大経発起序のお言葉に反しますので誤解とすべきでしょうか。

答、阿弥陀仏を釈尊の精神の理想化という説も一往の道理として受取られますが、それは矢張り知的思考の域を出ないものでありましょう。法蔵菩薩という位におり下られて私どものために四十八願を成就された。そこに何としても私を救わずにおかぬという如来の悲心のほどを頂戴して下さい。法蔵菩薩と五劫思惟とは一つになって私の生命に迫って下さいます。

問四、回心ということ一度あるべしとの意味がわかりません。回心の刹那に安堵と光明に満たされるものでしょうか。それとも何十年と聞法しているうちに、いつとはなしにお慈悲に気づきお念仏申すようになれば、回心があったと承知してよろしいのでしょうか。

答、回心ということは人によって、回心のときの意識的自覚がある人と、自覚の無い人があると思います。回心の一念を気づくのでなければならぬと強調する人がありますが、それは言い過ぎでしょう。何十年と聞

法しているうちにいつとはなく疑い晴れて有難くなってお念仏申す身となる。それで結構です。前田慧雲和上も「お仏飯で育てられたこの身はいつとはなしにお慈悲がしみこんで下さった」と私の恩師に語られたそうです。回心を意識するとしないとは問題でありません。ただいつ思い出しても有難い、間違いないという事さえ確かであれば、自然とお念仏申されることであります。

以上あら〳〵申上げました。言葉の足らぬところは御賢察下さい。どうか共々人間と生れた根本の一大事を全うさせていただきましょう。（七月二十三日）

——○——○——○——○——○——

信念の叫び

真田　増丸

御名をたたえる

南無阿弥陀仏は、大地の如し。
大地が万物を養い育てるように、如来は一切の衆生を摂取してはぐくみたまう。
南無阿弥陀仏は、大海の如し。
大海が清き流れも、濁れる流れも平等に、衆流を納れるように、如来は善人と悪人、智者と愚者との区別なく平等に大慈の御胸に摂め取りたまう。
南無阿弥陀仏は、日月の如し。
日月は四天下を何らのへだてなく照らす。如来は、一切衆生の心の闇を何等のへだてもなく照破したまう。

水と月

月は降らずして水にうかび、水は上らずして月を宿す。けれども、月はあくまで月であって水ではない、水はあくまで水であって決して月ではない。月は月にしてしかも水に宿り、水は水にしてしかも月をやどす。凡夫はあくまで凡夫であって仏ではない、仏はあくまで仏であって凡夫ではない。しかも仏の慈悲は、私ども凡夫の貪瞋煩悩の中にやどりたまい、凡夫はあくまで凡夫のままで御親の慈悲をやどす。ここにおいてこそ、極悪不善の我らごときものの救済がある。ああ、よろこばしい哉。

法悦三昧

ひそかにおもんみれば、人身うけ難く仏法あい難し。然るに今片州なれども人身をうけ、末代なれども仏法にあえり。生死をはなれて仏果にいたらんこと、今まさしくこれ時なり。このたびつとめずして、もし三途にかえりなば、まことに宝の山に入りて、手をむなしくしてかえらんがごとし。なかんずくに無常のかなしみは、まなこの前に満てり。一人として、誰かのがるべき。三悪の火坑はあしのしたにあり。仏法を行ぜずんばいかでかまぬがれん。みなひと、こころを同じくして、ねんごろに仏道を求むべし。

凡骨日誌抄（17）

――業（ごう）ということ――

西元宗助

皆さま。月日のたつことの早いこと、ほんとにウカウカしてはおれぬと思う昨今でございます。そして、このようにして、参らせていただくところ―浄土に参らせていただきつつあるんだナと、時には厳粛な気持ちになることもある昨今ですが、その半面、いよ〳〵低俗にして醜悪な自分を見せつけられては苦笑し、「ようこそ、ようこそ」とひそかにお念仏申すことのある昨今でもあります。

ともかく頭はいよいよ髪の毛がなくなりました。それで家人は、わたしの外出するときは必ず帽子をかむらせたがります。このあいだも雨の日、しかも夕刻でしたので、今日はノーハットで外出しようとすると、あなた、お帽子といいますので、今日はいいだろうといい返しますと、だって帽子かむったほうが（ハゲもかくれるし）大事な頭も保護されるしと、いいにくそうにいうものですから、私、ニコッと笑いながら、そうだったなと、素直に帽子をかむったことでございます。

○

さてこの七月の多くの日は、例年通り、お陰さまで高野山の天徳院で暮らさせていただきました。それは勿体ない日々でもありました。

その高野山であらためて感じましたことは、その高野山に残していられる本誌・念仏詩抄の木村無相さんの足跡の意外に大きいことでありました。高野山大学の高木諱元（しんげん）博士にお目にかかりますと、自分は学生時代のころ、全く行き塞って退学しようかとまで思いつめていたのを、かの無相さんが、いや無相先生が、とことん励ましてくださったので、気をとり直して仏道を志し勉学をつづけたものです。その恩人の先生が高野におられんのは淋しいと、この純情真摯の学部長さんはおっしゃる。それは学部長だけではなかった。

ある夕、高野山大学の首脳部の方々が歓迎懇談会を催してくださいましたが、その席上でも図書館長の田中千秋教授や学生部長の高田仁覚教授から、無相さんのお噂がでて、無相さんは、なんでもそのころ、終戦前後から昭和三十年のころのこと、高野山大学の風がわりな庶務課主任でおありだったようで、この独身風来の無相さんを囲んで、数名の学生有志が集って切磋琢磨したという。それから無相さんは、真言宗最高の道場である真別処（しんべつしょ）の行者の主任格で、若い行者をきびしくしごいたという。そのころのことを皆は懐しそうにおっしゃる。

なお、無相さんはそれから高野山を下りて、あらためて求道聞法、ついに念仏者になられたのである。それだけに高野の人々の、無相さんへの想いは深い。そして高野の人々に私の心うたれるのは、前記のように今もなお無相さんを懐しく思い、尊敬もし、転派転宗したなどと決して隔て心のおありにならないことである。尤もそれは無相さんのお徳の然らしめるものでもあるが。

○

一日、高野山宗務所の同和委員会に招かれ、その席上、「業」についての見解を問われましたので、わたしの所信を左のように申してみた。第一に、業は自業自得というように、自分の行為に対する責任の自覚を意味する言葉であって、本来、他人のことに関して、むやみに用いるべき言葉ではないこと。殊に他人の不幸や、他人の欠点や、他人の苦しんでいることについて、業という言葉を用いて、対他的に相手をきめつけることは甚だ仏意に反することで、それは最早や仏法ではないということ。

けだし仏法は、何宗であれ、み仏の大悲を根本とするもので、業―宿業ということも如来の大悲心から生じたるもので、じじつ如来の大悲に照らされて、はじめてわたしの業でありますと、いわゆる運命論を超えて主体的に自覚する心境がひらかれるのではありませんか。すくなくとも私においては、そうなのでございますがと、おそるおそる申してみたことでありました。さすが真言大徳の方々、心から肯いていただけたようであった。

（なお木村無相さんには申訳のないことをしました。高野を下山する日、長文のお手紙と長文の詩をいただいたのですが、下山のどさくさに紛失して今もって行方不明なのです。ごめんください。）

聞光願生

清水凡禿

○

仏陀の救いの目あては、ハテ何者であったろう？智者であったか？いや〳〵愚者であった、悪人であった。それにもかかわらず、智者になり善人になったような気がしたときは、救われたような気になり、悪人となったときは、救いから洩れるような気になる。愚かしいことだ。

口伝鈔に曰く「しかるにわが心凡夫げもなくば、さてはわれ凡夫にあらねばこの願に漏れやせんと思うべきなり。然るに吾等が心、すでに貪・瞋・痴の三毒、みなおなじく具足す。これがためとて起さるる願なれば、往生その機として必定なるべしとなり」

何度となく読み返し〳〵すればするほど、いよいよ味わいの深くなるのを覚え、かつ我が身の幸を喜ばずにいられない。私はおろかであったことが、またとなく有難い。私は悪人であったことがまたとなく有難い。

（昭和十三・二月）

○

町内の若い人々が一晩がかりで路上に水を撒いた。あにはからんや、翌朝になったらしっかり凍りついてしまった。街行く人々は歩きにくいことおびただしい、自転車なんかは横すべりして見るも気の毒な様子だった。よくあれかしと思ってしたことが意外の方面に飛んだ渦をまいて多くの御迷惑をかけることが数多い。そうだ！私はただ、法を仰ぎつつまっしぐらに進むだけだ。

よきに謝し、悪しきにわびつつ進むより外ないのだ。それが唯一の道なのだ、私に与えられた心の落付き場所だ。

（昭和十四・四月）

○

毎日の様に多くの方々にお逢いしているが、一人々々にみな悩みを持っておいでになる。かく云う私もまた悩んでいる一人である。みな痛ましい姿である。親は子のために泣き、子は親のために泣く。一体これはどうしたものか。

それを周囲に妥協しカムフラージしてよいものなのか？

或る先輩が、人間が人間として生きていく根底を極悪深重の凡夫であると云う自覚にたたなければ、到底人間が人間として生きてゆけるものでないと云われたお言葉を読んだが、まったくそうであると思われる。すべての事件の解決がここから出発しなければ徹底的解決とは云われぬ。悩みそのものが一体どこから生れて来たのか。よく〳〵つよい御教えの光に照らされてまるはだかの自分の姿に直面した時に、悩みの正体も判りしたがって事件は春の雪のように解決するのではあるまいか。

（昭和十五・二月）

○

春光うら〻かな時は御念仏もなだらに出て、これも阿弥陀様の御方便と有難く味わさせていただいているが、一度利害打算の上、感情の上に黒雲が巻き起ると、とんでもない怒濤が逆巻いて何もかもが判らなくなり、無我夢中になってはてしなく悩む。

不思議や、その悩む姿を明瞭に見るいま一つの自分があって、悩む根本はこれではないか、なんと呆れたお前である、それが判らぬかと呼ばれる。唯事ではない、何としたお働きだろう。だん〳〵明瞭になるにつれて、いよ〳〵この私が如来様のお目当であった。誰でもない、たった一人のこの私が目標とされてあったのだと気付かされた時に、唯々広大な御親のお慈悲のほどが拝まれる。

（昭和十五・三月）

○

「急がば廻れ」と云うことがある。それが本当に身について味わわれるまでには、容易のことではない。私はいつでも事に直面したときに、どうしたならそうした妙な心持が起らぬだろうか、どうしたらそれを直すことが出来ようかと、そればかりに苦労して、結局疲れはてて虻蜂とらずになる。そうだ！私は三毒の煩悩の持主であったのだ、妄念より外に心のないのが私であったのだと気付かせていただくときに、何とした愚かしいことであろう、何とかすれば、すぐ妄念を羽織についた塵ぐらいに考えて、叩けばすぐ落ちるように思い、それにのみ没頭して疲れはてる身の愚かさが情なくなる。

（昭和十五・七月）

○

そのかみ聖徳太子が煩悶せられて、どうともする事が出来なくなられたとき、いつでも夢殿に二、三日の参籠をせられて「世間虚仮唯仏是真」と心が定められ、そこに湧然としてこみあげる力をもって世事にあたられたという御講

話をお聴きし、いつか目頭が熱くなっていた。
ほんとうにそうだ、太子様も人の子であられた。私は幸に夢殿なるお念仏によらせていただき、しばしば躓きながらも、立ちあがる力を与えられて日暮しをさせていただくことは実に有難いことだ。

（昭和十五・八月）

○

和歌抄

春浅み試験に破れ悩むわれを　みどりの丘になぐさめし父

ものみなに恵まれざりし父なれど　こころゆたかに念仏に生く

はるばるとたとへいず地のはてなりと　み名称ふれば心安けき　（三十一才作）

信ずるもたのむもいらず唯のただ　六字のみ名に包まるるのみ　（三十六才作）

子等もなくはらからもなき身にしあれば　法の友だち有難きかな

喜びも悲しみもただとけ合ふは念仏のみの世界なりけり

（三十七才作）

よきにつけ悪しきにつけて喜ぶは　唯念仏の世界なりけり　（三十八才作）

うつし世に唯光きく道こそは　末とほりたる力なりけり

（四十才作）

菊の香にいつしかそまりみ仏の一人子となりて今日を迎へぬ（四十二才作）

ひたすらにわが身の罪に泣くきはに　呼びます親の声聞こゆなり

大願の舟はあはてる要もなし　ゆられるままに風のまにまに（四十九才、辞世）

念仏詩抄

木村無相

それは大（おお）ムリ

香師おおせに　香師＝香樹院徳龍師

〝よいところで若存若亡——

（存るがごとく亡きがごとく）

そのほかはみな

ヒトマネ仁義（じんぎ）

虚仮不実なり——

これは自性の心なれば百ペン

生まれかわりてもかわらぬ心なり〟

その迷いの心

思いかためてまいろうとしても

それは大ムリ——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ヨキヒトに

香師おおせに

〝マヨイの凡夫がサトリの道しらぬのが

なんでハジであろう

「コのトシになって今このウタガイが

出たのアヤマリがあるのといえばハズカシイ」などというガマンはいらぬ

どんなこと聞いてもハジではない

なんでもかまわず聞くがよい——〟

聞きがいのあるヨキヒトに

ヨキヒトに――
悪知識に聞くと
かえって道をまちがえる

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

信心決定

香師おおせに
〝ナムアミダブツは
テマもヒマもいらぬほどに
「称えたや称えたや」の思いに
なりて
ねてもさめても称うべし――
私に浄土にまいるタネは無けれども
ナムアミダブツがタネなりと
ウタガイ晴れたが信心決定なり〟
聖人『正信念仏偈』さまに

〝本願の名号は正定の業なり
至心信楽の願を因とす〟と――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今のわたし

香師おおせに
〝如来のおン目を
えぐりぬくような悪人をも
すがりついても助けたいが
如来の御慈悲――
それはそうでなければならぬ〟

そうでなければ
このわたしが助からぬ
だが――
それほどの御恩でも
やっぱり身についてはわかって

おらぬのが今のわたし――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

いつもいつも今が

香師おおせに
〝いま人間に生れて初めての
お慈悲ではない
地獄の釜の中からお慈悲に
めぐまれ
形に影が離れても
離れぬものが如来のお慈悲なり〟

お慈悲　お慈悲――
地獄の釜の中から一つになりて
はなれたまわぬ
お慈悲　お慈悲――
いつもいつも今が

お慈悲のまっただ中――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ひと声ひと声が

念仏詩抄より

ひと声
ひと声が
本願のお名のり――

ひと声
ひと声が
本願のお呼びかけ――

ひと声
ひと声が
本願のおたすけ――

ともしび

花田正夫

○

道宗は唯一つ御詞をいつも聴聞申すがはじめたるように有難きよし申され候　（御一代聞書）

私どもはいつも新しいものを追い求めているが、すぐ陳腐してしまう。こうした世に古くならない新しさを持つものこそ真物であろう。

紀元前、だれの手になったかもしれぬミロのビーナス像の美しさは、そうした趣を持っているが、宗教上のまことの言葉は不滅の徳音があって、何度聞いてもいつも新しく心をうつ、それで金言・実語と称せられる。

さて万物流転の世に、こうした光を見出すことは、行く手も見えぬ闇の夜に、北斗の不動の星を仰ぐ喜びである。しかし洪鐘も撞木を待って鳴る。真実の言葉もただ知識として読んだのでは、知った、覚えたで終る。それを身読するとき、滾々としてつきぬ新鮮な妙味があふれる。そこに「天地は失せなん、されどわが言葉は永遠にむなしからじ」とのナザルの聖者の名言もうなずかされる。

（昭五六・八・十六日）

○

夜もすがら仏の道をたずぬれば　わが心にぞたずね入りぬる。

（源信僧都）

アウグスチンが「目を外に向けるな、内に向けよ、真理はそこにこそ宿る」と言っているが、「夜もすがら仏の道を求むればわが心にぞ尋ね入りぬる」と云われた源信僧都は自ら頑魯の者と慚愧せられて、そこに極重悪人の身の救いの声は、ただ念仏一つであったと随喜していられる。

私は親鸞聖人に感動して聖人をお慕いし、或は伝記を読み、旧跡を訪ねた。然しそれでは聖人の外面にしか触れ得ないので、次には聖人の真影や著書や筆跡に依ろうと努めた。これも竿を持って星を落そうとする子供の愚に終った。

その時、恩師から、「聖人にお会い申すには、目を内に向けよ」と教えられ、わが身を省みると、たまに御法が喜ばれるにつけ、一人居て喜ばば二人と思うべしのお声が聞こえ、悲しむべきことも悲しめぬにつけ、親鸞も同じ心にてありけりと、いつも私と一つ身になって下さる御心に触れはじめた。

（昭・五六・六・十四日）

○

衆生苦悩我苦悩　衆生安楽我安楽

安芸門徒の人が東京に出て、弁護士として立派に一家を建てた。ある夏休みに、子供二人を母の住む郷里に帰らせ、また珍しい品を沢山届けた。

篤信の母がその包を解きながら、「息子も成功しているようだが、人間はいつなんどき、どんな事が起こるかしれたものでないのに、はやくそれに気づいて仏様の御心を喜ぶようになってくれたらなあ」とひとりごとを言った。傍でこれを聞いていた孫が、そのままを手紙に書いて親に知らせた。

これを読んだ弁護士が、今まで母をよろこばせようと種々なことをしてきたが、親の本当のよろこびは、自分が真実の幸せになることであったと知り、聞法の人となった。

そこに衆生と一つ身になってくださる仏様のお慈悲を喜ぶようになり、母こそ身をもってそれを教えて下さった善知識であったと常に語り続けた。これを聞いて老母の喜びはまた非常なものであった。

（昭・五六・四・十二日）

○

西岸上、人有りて喚うて曰く「汝一心正念にして直ちに来れ」と

（善導大師観経義疏）

戦後三十七年、一人息子の生還を信じて待ち続けた〝岸壁の母〟端野いせさんが、去る七月一日、八十一で亡くなった。しかも十三日に、息子の新二さんが中国で生きている知らせがあったと報道され、感無量であった。

かって白井成允先生が「釈尊をはじめ多くの仏様はお座像であるのに、阿弥陀仏ばかりはお立像である。一体だれのために、いつから立ち続けていて下さるのでしょうか」としみじみ語られたことがあった。

岸壁に永い歳月立ち続けた端野さんの死を聞き、まざまざと先生のご述懐が思い起こされたのである。親心子知らずの俚諺通りに、弥陀仏の永劫にわたるご苦労をも、ひとごとにして、耳馴れ雀で聞き流している身をあらためてかえりみさせられ冷汗三斗の思いである。

（昭・五六年十・十八日）

○

水の味と塩の味

今回入院中、高熱と下痢が続き、食欲が全然無くなって、ひどい脱水症状におちた時、調味料の入った飲料水は受けつけないで、真水だけが喉を潤してくれた。丁度人の言葉が空しくなる時、仏陀の御声だけが心にしみるように。

また三十年も前に、心臓病で入院した時、塩分を禁じられて十日余、初めて許された時の塩のおいしかったことは今も忘れられない。

こうしたことから、水の味と塩の味を知らされ、私共が平素無事な時、人生で大切な事を沢山見落していることを改めて省みさせられた。

第一に、残水の小魚、食を争うて渇を知らずで、名利に狂奔して身の無常を忘れ、人生の真目的を考えようともせぬ軽薄さである。

次に、生死を解脱された仏陀が、苦海に沈みきって浮かぶ瀬のない我らに、悲心やむことなく、順逆の両縁をとおして随時、随所に、お呼びかけ下さることに耳を借そうともしていないこと等々である。

（昭・五七・二・八日）

○

念仏者は無碍の一道なり

（歎異抄第七章）

隣家の小犬に吠えつかれて泣き叫ぶ子も、親に抱きあげられるとやすらぐ。良寛さんの手紙に「災難にあう時はあうがよろしく候。死ぬ時は死ぬがよろしく候」とあるのも久遠の御親に抱かれて、身にもつ業苦から逃げず争わず、受けて越えられたからであろう。

還歴を迎えられた池山榮吉先生が、内に外に障りの多い中に「たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ」と、業縁次第でいかなる業苦に沈むとも、摂取不捨の心光のもとに、さもあらばあれと超えられたのであった。

直腸癌で最後の病床での臼杵祖山老師の遺詠に「さわりなくすべてを照らすみ光は、障りある身の上にこそ照るれ」とある。み仏が尽十方無碍の光明を放たれるのは、煩悩具足の凡夫の我等が、どこでもいつでも障りのやまぬ事のためであったと、障り多きにつけ碍りない慈光を讃仰せられたのである。

（昭五七・四・五日）

○

われ悪しと知られたこころ　仏の心よ

（浅原才市）

鳥取の妙好人、源左同行に或人が「あんたのことを京都の書店が本にしたいと云っている」と告げると「滅相な、この肉体のある限り、縁にふれると、いつ手が後ろに回るかも知れませんから」と拝まんばかりにことわられた。

われ〳〵の眼は外に向っていて、他人の顔の汚れはよく見えても自分の顔は見えない。いつも我よし、彼あしの心ばかりである。蓮如上人が、たれのともがらも我は悪しと思う人、一人としてあるべからず、と誡められるところである。

自分の顔を見るには鏡がいる。われ〳〵の心は仏の大円妙鏡に照らされてのみ、我があさましさも知らされ、嬉しはずかしと、浄土への旅がはじまる。

（昭五七・六・六日）

○

ただ念仏もうすのみぞ末通りたる大慈悲心にて候

（歎異抄四章）

医大の三年で亡くなった友が、人の病を治すことにかかっていた自分が、こんなに早く駄目になるとは知らなかった！と言った時、枕頭に集った友人も親戚も、慰める言葉もなく、重苦しい沈黙が続いた。

足利浄円師が、医師であった義兄の臨終を見舞われて、

今ははや語らんとして言葉なし、御名称えつつ問いつこたえつ

と詠じられている。

死を前にすると、どんな言葉もむなしくなるが、こうした身にしみわたる声は、この苦悩をかねてしろしめして、悲心切々と呼びかけて下さる仏の声、念仏ばかりが光であり、力である。

私の父の最後が近づいて、医師からも見放され、慰めるすべもなくなった時「今生いかにいとおし不憫と思うとも存知の如く助けがたければ、この慈悲始終なし」との親鸞聖人の仰せが身にしみ、行き詰った心の底が自然に抜けて、念仏申しながら落着いて最後まで看護を続けることができた。

（昭五七・七・十八日）

あとがき

今日は終戦記念日、三十七年前の頃を想い感無量であります。学友蜂屋道彦（当時広島逓信病院長）君が原爆を浴び、その記録を、『ヒロシマ日記』として出版し、それが七ケ国語に訳されて世界の注目をひいたことも、焼土と化した名古屋で衣食住を求めて右往左往して、歌も笑いも失ったことも思い併せております。

慈光誌もこうした頃、仏の本願を心の渇いた私共が共々に味いたいの願いから出版させていただきました。崩れぬ大地、消えぬ光がなくては、本当の安住は得られません。物の不足した頃、物さえあればと増産を叫ばれましたが、物は豊かになりました今日、そのむなしさに、真実の心のよるべを求める声は到る処に聞かれますについて改めて畢意依の仏徳を渇仰してやみません。

昭和十三年、日支の風雲急な秋亡くなられた池山先生の聖人に導かれた御体験を本号に頂きました。相対五分五分の心しかない私共にはよき人の教え一つが力であります。「手織の着物」は近角先生がよく仰言ったことですが、福島先生が御自身の上でお味わいを述べて下さったものです。

井上様の一文は懇切にお尋ねにこたえて下さいました。

西元様は夏季の高野山大学に出講せられた時、業について明瞭に大切な点を述べて下さいました。

清水凡禿さんは盛岡の妙好人でありますが、日常生活を紙面としてその上に顕われる念仏の光を随喜し、人々に頒たれたものであります。

木村無相さんは、念仏詩を続けてお送り頂き、その都度云うに云えぬ御力添えをうけております。読むにも聞くにもいつも身をもって受けていられますことは刮目させられます。そこに作った詩でなく自然に生まれた法味であります。

私の痼疾も退院して三ケ月無事にすごさせて頂いております。この機に親鸞聖人が度々書写してお勧め下さった、唯信鈔、後世物語、一念多念、自力他力の意訳文を一千部印刷し、御禮のしるしとさせて頂きました。歎異抄の著者唯円房もよく精読されていました、私共もまた信の旅の枝折とさせていただきましょう。

○

せめて名古屋の一道会だけでも開始したいと願っておりますが、秋の涼風を待っております。

〈御案内〉

十月十日（第二日曜）午后一時半、一道会例會。
南区駈上町二ノ八六。鬼頭氏宅。
市バス、新郊通り一丁目下車。
地下鉄、新端橋終点下車。
名鉄、呼続下車

慈光　第三十四巻　第九号　昭和五十七年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話　八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋六一〇四七〇番
便番号　四五七